
バイオハザード ~ Eternal Darkness ~

新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード〜Eternal Darkness〜

【Nコード】

N5012D

【作者名】

新人

【あらすじ】

バイオハザードのもう一つの物語。アメリカワシントンで起こったバイオハザード。ラクーンが消えたあの日から全てが始まった。バイオハザード事件に終焉はあるのか・・・

プロローグ（前書き）

前作では少々完成を急ぐあまり雑になってしまいましたが、この作品はできるかぎりがんばってみますので、よろしく願います。

プロローグ

彼らは偉大な力を得ようとしていた。絶対的な力を持つ強靱な肉体。一生死ぬことのない不死の体。彼らは毎日研究に没頭していた。あるものたちは、科学者を利用し、そのチカラを、世界征服、などに使おうとしている。

そしてそれはついに完成した。

だが、問題が発生した。これには、副作用があった。

確かに、強靱な肉体、不老不死の体、それを得ることはできた。しかし、このチカラは、自分の理性を狂わせ、人々を襲い始める。そして、醜い姿へと変貌していった。これは彼らにとっても予想外のことであった。なぜなら完成したと思い込んでいたからである。彼らは自分の持てる力を全て出し切った。それに、自分の間違いを認めたくなかったからである。

彼らは、自分たちにもいずれこうなるときが来るだろうと、抗体を作り始めた。

しかし、どれもうまくいかず、全てが失敗に終わった。

しかし、彼らはあきらめなかった。日が経ち、やっと1つの抗体ができた。ウィルスを完全に殺すことはできなかったが、

ウィルスの働きを抑制する力があつた。そして彼らは、そのウィルスを封印することを決めた。しかし、彼らの仲間に、反逆者が出た。そのチカラを自分のおもように使いたい。世界を征服したい。その思いは悲劇を呼んだ。

彼らは反逆者に全員殺され、ウィルスは持ち去られてしまった。

そして、ウィルスはある組織の手に渡った。

組織のものは、このウィルスをT・ウィルスと呼んだ。そして、T・ウィルスは外部に漏れてしまう。

それと同時に開発されていたG・ウィルスも。

これが今回の事件の発端である。

記録者 不明

プロローグ2（前書き）

長いプロローグになってしまいました。

3 もやろつか迷っていますがやらないほうがいいのでしょうか・・・

プロローグ2

アメリカ ワシントンD・C ワシントン記念塔前 AM9:26分

真っ白で高く聳え立っているワシントン記念塔に、太陽の光が反射し、地面を照り付けている。

そこに一台の大型トラックが止まっていた。道行く人は不思議そうに見ていたがあまり気にしていなかった。

すでに出勤時間は過ぎていたのであまり人は多くなかった。それでも、観光客などで人が少なすぎるというほどでもなかった。

あっという間に時は過ぎていく。

時間は10:00を指そうとしていた。そして、10:00をさした瞬間、大型トラックは、熱に包まれた。

激しい爆音が聞こえ、逃げ惑う人々の悲鳴。崩れ落ちるワシントン記念塔。その前の建物も完全に姿を消していた。

それから10分後、サイレンを鳴らしながらやってくるパトカー、救急車、マスコミ。

そして、町にあった大型ディスプレイに緊急ニュースが入った。

「今日10:00分に爆発テロが発生しました。場所は、ワシントン記念塔、連邦議会議事堂、アーリントン国立基地です。」

何を狙った犯行かわかりませんが、死者は、100万人に上ると考えられています」

多くの死者は、病院に運ばれようとしていた。そのとき、死体の指が少し動いた。救急隊員は生きているとおもい、その場で応急処置をしようとした。その時、その遺体は突然襲い掛かったのだ。

救急隊員は服を裂かれ、肉を裂かれ、殺された。死体はその肉をむさばり食べている。

この事態はすぐ本部に連絡された。警官は銃を抜くと死体に向かっ

て撃った。しかし、死体はびくともせずこちらを見た。

もう一発引き金を引こうとしていたとき、背後で死体が動き出し、警官を襲った。死体は肉に食らいつこうともうとするが、

警官が必死にそれを拒んだ。しかし、警官は力尽き、餌となってしまった。

野次馬たちは我先にと逃げようとする。しかし、その背後には覚醒した死体がたくさん歩いてきた。

人々は抵抗できないままこの世を去った。しかし、覚醒したものもいた。知恵も持たずただ食欲を満たすだけに歩き回る死体。ゾンビへと。

始まり

暗く光の差し込むことのない地下。そこには巨大な地下基地があった。

その一室、そこは厚い扉があり、武装した兵士が入り口を守っていた。

その部屋に、電気がつき明るくなった。

そこには、大きなテーブルが1つと、いすがたくさん並んでいた。

そこに、黒いスーツを着込んだ集団が入ってくる。

それは、世界各国の種族の人間が集まっていた。全員が席へつくと、1人の男が口を開いた。

「では、T・ウィルスの流出の件だが、すでに、ワシントンに蔓延してしまった。これは、あなたの部下が勝手にしたことだ。これはあなたの責任だ」

男は、前に座っている男を見た。その男はかれた声で、

「それはじきに片付く。核を投下してくれれば・・・」

そこで、男の声をさえぎり、高い女の声が部屋に響いた。

「それは現在の段階では不可能です。ワシントンは、封鎖します」

「核を使わないとなればどう片付けるつもりだ」

「使わないとは言っていないません。それに、今は実験のうちですから」

「実験だと！！そんなことは聞いていないが・・・」

かすれた声と高い女の声。だんだんうるさくなってきたので、最初に言葉を発した男が口を開いた。

「ここで皆さんにも話しておこう。このワシントンでの反逆者の勝手な行動がわれわれにとってよい結果となった。

そして、議会で話し合った結果、これは大規模な実験とみなされた。そこで特殊部隊を派遣し、ウィルスの強さを確認、

改良の糸口を見つける。その状況はここにあるモニターで確認できる」

そういうと、その男の後ろに巨大なモニターが現れる。モニターには、ワシントン各地の防犯カメラなどの映像が現れていた。

それを見ると、皮膚が腐ったゾンビが歩き回っていた。

「表向きはこうだ。ワシントンでウィルスが蔓延。生存者とウィルスのサンプル確保。無事帰還。」

これが特殊部隊に送られる指令だ。そして、われわれは高みの見物というわけだ」

そして、男は席を立った。

「私はこれからアフリカに跳ばなければならないので、代理人をおいておく。以上」

男は、席を立ち扉の奥に消えた。入れ違いに黒いスーツを着込んだ若い男が出てきた。

そして、照明が消え、あたりはモニターの明かりが照らしていた。

この光が不気味だった。

アメリカ 某所 米軍基地内 特殊作戦ミッションルーム

ここでは、巨大なテーブルに、ワシントンの正確な地図がおり、その周りに、軍服の男が13人立っていた。

そこで、サングラスをかけた男が口を開いた。

「さっき話したように、われわれはワシントンで極秘任務を行う。

これで成果を挙げられれば、資金調達などさまざまな軍需用品を得ることができる。あと30分後にここを出発する。各自、資料に目を通しておけ」

そういうと、サングラスをかけた男は部屋から出た。

そして、一番奥の部屋のドアをノックしようとしたとき、中から声が聞こえた。

「・・・わかった。では、もうすぐそちらに到着する。いい結果が出ることを期待している」

そして、ノックした。響きのいい音が2回なると、中から、声が聞こえた。

「入れ」

男は、ドアを開けると、一枚のレポート用紙を出し、

「これが、今回の極秘任務を行うメンバーです」

そついうと、男はレポート用紙を差し出した。その紙には手記で、名前が書かれていた。

作戦隊長 レーニン・アルバート

・ジェイムス・ロバード

・ダニエル・マック

・ジェイソン・ウルマン

・ケイト・クリス

・ロバート・アンダーソン

・リチャード・バーナー

・ゲイル・ハワード

・マイク・ウィバリー

・デビッド・ギブソン

・カール・ストライカー

・トム・ブラック

・ブライアン・クラーク

椅子に座った人物は、低い声で、
「いいだろう。出撃を許可する」

アルバートは、その一言を聞くと、部屋を出た。

これから、モルモット地獄がまわっているということも知らずに。そして、自分たちが実験台にされるということは知る由もなかった。

散会（前書き）

今週は更新できません。

スイマセン。

こちらの事情がありまして・・・

散会

作戦本部へと戻ったアルバートは、隊員12名に命令した。

「今から、事件が発生したワシントンへ飛ぶ。準備はいいな？」
全員がうなずく。

「行くぞ」

12人は、部屋を出て外へ向かった。

ヘリポートに向かう際に、受付の女が声をかけてきた。

「失礼します。IDカードを提示してください」

アルバートと、隊員たちはIDカードを見せた。すると、

「どうぞ」

といったとき、前の扉が開いた。

そこには、CH-47 チヌークという輸送用ヘリコプターが止まっていた。

そして、ヘリに乗った。

チヌークの扉が閉められると、2つ付いている回転翼が回りだした。それから、機体が宙に浮かび、飛んだ。

機内では、隊員たちが武器を調整したり、マガジンの確認をしていたりと、さまざまなことをしていた。

40分ぐらいが経過し、ついに目的地に到着した。そのとき、ジェイソンが、窓から外を眺めた。

「な・・・何が起こったんだ・・・」

外の景色は、車が横転し、血が流れていたり、煙が出ていたりした。ヘリのパイロットは、広い場所を探し、着陸準備を始めた。

着陸し、モーターの音が小さくなると同時に、ドアが開いた。その瞬間、異臭が漂ってきた。トムは、鼻を覆うと

「くっせえええ！！どうなってんだよ！」

と、怒っていた。ほかの隊員も全員が降りてきた。隊員たちの体には、銃が肩にかかっている、マガジンがいたるところにしまっているあ

った。

そして、ヘリは飛び立っていった。そのとき、アルバートが口を開いた。

「まずは、こちら辺の探索だ。ペアで動いてもらう。俺は1人でいい。何かあったら、無線で皆に知らせてくれ。以上」

ペアになったのは、

単独

・レーニン・アルバート
ペア

・ダニエル・マック	・ジェイソン・ウルマン	・リ
チャード・バーナー	・マイク・ウィバリー	
・ケイト・クリス	・ブライアン・クラーク	・ゲ
イル・ハワード	・カール・ストライカー	

・ジェイムス・ロバード	・デビッド・ギブソン
・トム・ブラック	・ロバート・アンダーソン

このメンバーだった。

そして、アルバート以外は、全員が散会した。アルバートは、先ほどヘリから降ろしてもらった、車の中にある武器が入った箱をあけ、中から武器を取り出した。

そして、ある程度の弾丸と、銃、マガジンをもてるだけもち、車から降りて、探索を開始した。

暗い闇。モニターから出る光だけが、あたりを照らしていた。その

中に、人がいた。

「そろそろ、委員会の連中も邪魔になってきたな。潮時か・・・」
男の声。男は、ひとつのボタンを押した。そして、モニターに目をやった。

モニターに映っているのが、5、6人の男女。

彼らは、熱心にその部屋にあるモニターを見ている。モニターには特殊部隊の姿。

そのとき、彼らの部屋の電気が消えた。あたりにはざわめきと、悲鳴。

「さようなら」

そして、静かになった。彼らのいた部屋は、モニターの光だけがあったりを照らしていた。

「掃除はすんだ」

そついうと、男は静かに部屋を出て行った。

恐怖（前書き）

誤字脱字がありましたら、お手数ですが、お知らせください。

お詫び

初めての作品「バイオ・ハザード」の作品で、

あまりにも、下手にできてしまい皆様に不快な思いをさせてしまったことを後悔しています。

今後、こういうことにならないように、

もっと勉強をして、経験をつんでいきたいと思っています。

誠に申し訳ありませんでした。

恐怖

アルバートは、大き目の道路を歩いていた。

しかし、炎上した車や、事故車などが転がっており、道路は狭かった。

周りを見渡しながら警戒して動いていた。

そのとき、前方にあるトラックの影で何かが動く気配がした。

アルバートは、愛銃「デザートイーグル50・A E」を構え慎重に歩いていた。

さっきの位置では見えなかったトラックの裏側に銃口を向けた。

しかし、何もいなかった。安心したアルバートは銃をしまおうとした。

そのとき、強い力で突き飛ばされた。

「くっ」

そして、転んだところに、そいつは倒れこんできた。

そして、アルバートは見た。

皮膚が剥がれ落ち、肉が裂け、真っ赤な眼をした、人型の物体を。

怪物は、強い力でアルバートを押さえ込むと、噛み付こうとしてきた。

アルバートは抵抗するが、相手は怪力の持ち主だった。

すかさず、腹にけりを入れると、そいつはひるんだ。

（いまだ！！）

そうおもい手元を見ると、デザートイーグルは、突き飛ばされた衝撃で、

トラックの下に転がっていった。

そこは、腕を限界まで伸ばしても届かない距離だった。

「くそっ！！」

怪物は、また強い力で襲ってきた。

（寝たままでは力負けする。）

アルバートは、怪物を力任せに蹴り飛ばした。

怪物は、アルバートの上からどいた。

すぐに、アルバートは起き上がり、背中にあった、「ベネリM4スーペル90」を取り出し、

引き金を引いた。

怪物の頭はきれいに穴が開いていた。そのまま後ろに倒れた。

「なんなんだ。こいつは・・・」

ベネリを戻すと、トラックの下からデザートイーグルを取り出した。そのとき、遠くからコンクリートを何かが走ってくる音がした。

「爪・・・か？」

そして、音は近くなり、現れたのは、犬だった。

それもただの犬ではない。

形はドーベルマンだが、体が違った。さっきの怪物同様、腐っていた。

「どうなつてんだ！この町は！！」

アルバートは、デザートイーグルを取り出し構える。

しかし、犬のすばやい動きに翻弄され、なかなか標準が合わなかった。

犬は、助走をつけ、飛び掛ってきた。

アルバートは、チャンス逃さなかった。

空中では、どんなに身体能力が優れていようと身動きが取れなくなる。

それを狙い、頭めがけて撃った。

一撃。

デザートイーグルの殺傷能力の高さと、アルバートの射撃能力が合わさり、一撃で

葬り去った。

頭を打ちぬかれた犬は、地面に横たわり、活動を停止した。

「生き物は全て変化しているのか？・・・」

そのときだった、コンクリートと、爪があたる音が聞こえた。

アルバートは、銃を構え、後ろを向いた。

そこには、銃声を聞きつけた化け物と化した犬が10匹ほど、走ってきていた。

「なっ・・・」

アルバートは、辺りを見回した。すると、キーがささっているバイクが転がっていた。

「あれだ」

アルバートは、バイクの元に駆け寄り、急いでバイクを起こすと、エンジンをかけ、バイクを走らせた。

・・・速い。

バイクと普通の犬では速さは段違いなはずだが、この犬どもは、バイクに追いついてきている。

「くそっ・・・」

アルバートは、サイドミラーを見た。そこには、飛び掛ってくる一匹の犬の姿。

すかさず、体をひねらせバイクを傾け、攻撃をかわした。

その先の十字路を、右に曲がる。

その先には、大量の人型の化け物。

「ついてないぜ・・・」

前には、化け物、後ろにも犬の化け物。しかも、一本道。とるべき行動は一つだった。

アルバートは、バイクを、最大まで加速させ、バイクのシートの上に立ち、

近くにあった住宅の一階の窓を目指し、思い切り飛んだ。

アルバートは窓に激突し、窓を割り、中に進入した。

そこには、犬が入ってこられなかった。人型の怪物も同じく。電気がついておらず、薄暗かった。電気をつけようとしたが、

電力が来ておらず、つかなかった。

アルバートは家を探索することにした。

経つこと30分。一通り探索した。敵もない。

アルバートは、2階のベランダに出て、外を眺めた。
下は、怪物だらけだった。

まず、自分の身の安全は確保した。あとは、仲間への通信。
アルバートは、無線を取り出し、周波数を合わせる。

「こちらアルバート。聞こえるか、こちらアルバート」

暗い部屋に、声が響く。

いくらまっても、何も聞こえない。

周波数を変えてみる。

何も聞こえない。

そのとき、何気なくまわしたところで声が聞こえた。

「・・・誰か・・・これを聞いている勇敢な・・・戦士よ・・・
最後の願いがある・・・」

アルバートは反射的に声が出てしまった。

「どうした？大丈夫か？」

「おお・・・この放送を聴いてくれるものが・・・でた・・・か。
お前は・・・誰だ？」

「俺か？米軍の特殊部隊さ」

「そう・・・か。お前に・・・頼みごと・・・をしても・・・いいか？
「なんだ？」

「一度しか・・・言わない。よく・・・聞け・・・。この化け物
どもを・・・作った工場は・・・」

そこまで言いかけたとき、銃声が聞こえた。そこから何も聞こえな
くなった。

「おい・・・オイ。どうした！！何かあったのか？・・・」

すると、無線から別の男の声が聞こえてきた。

「お元気かな？まだ死んでいないとは・・・思いのほかタフだな」

「誰だ。おまえ」

そう聞いたとき、男は、鼻で笑った。

「誰だと聞かれて答えるはずないだろ。ここまでの被害を出した張
本人だからな」

「これは全部お前がやったのか？」

「そうだ。まあ待て。こんなことを言いに来たんじゃない。少し、ヒントを与えようと思ってね」

「ヒントだと・・・」

「ああ。一度しか言わない。よく聞け。貴様らには、ここで起きた爆発事件の場所が書かれた地図が渡されているはずだ。

その地点に、この工場の場所がある。爆発地点は三カ所。つまり、工場の数は3つだ。

健闘を祈る。またいつか会おうか。アルバート君」

「ま・・・待て！！」

しかし、もう何も聞こえなかった。

（だがこれで、こいつらを作り出していた悪魔の工場の場所がわかった。しかし、1人じゃ危険すぎる。）

その後、アルバートは外に出る方法を探していた。

玄関から普通に出れば化け物どもの餌になってしまう。

裏口も化け物だらけ。

残る方法は、強行突破。しかし、危険だ。

そうになると、もう1つしか残っていなかった。

屋根の上だ。屋根の上をつたっていけば、その工場にたどりつけるかもしれない。

アルバートは、まず、キッチンからテーブルとイスを2階のベランダに運んだ。

そして、テーブルの上にイスを置き、その上にのった。ぎりぎりだったか

何とか届いて、屋根に乗った。

そして、無線を取り出した。

「誰か。応答しろ！！だれでもいい！」

数秒後、応答があった。

「こちらダニエル。応答願います。隊長」

「ダニエルか」

「はい。ここには、隊長以外、全員そろっています」

「都合がいい・・・いまどこだ？」

「今は、最初に降り立ったところに戻ってきました。そこで、今建物潜伏中です」

「そうか・・・今そっちに行く。待っている」

「了解」

無線をしまうと、アルバートは立ち上がった。そして、走り出した。もちろんここは屋根の上。落ちれば、死あるいは、動けなくなるほどの重傷を負い、化け物の餌になるからだ。

そして、平らな屋根に乗ったとき、近くのほうで爆音が聞こえた。音のほうを見ると、黒いスーツを着込んだ大型の男が2、3人歩いていった。

「生存者か？」

しかし、気配は人間のものではなかった。

（あいつらは・・・一体・・・）

そう思いながら、アルバートは先を急いだ。

そして、集合場所まであと少しというところで、目の前に現れたものがいた。

真っ黒なスーツに身を包み、青白い顔を覗かせていたものが。

そいつは、人間の言葉を発した。

「我はタイラント。人間どもを潰し、理想の世界を作る者の手下。人間は1人たりとも生きては返さん」

片言ではあったが、聞き取れる言葉だった。

「くそ！！あと少しだったのに！！」

アルバートは、デザートイーグルを取り出した。そして、アルバートは銃を構えた。

暴君（前書き）

題名の意味は、「暴君」＝「タイラント」です

暴君

タイラントは、ゆっくり歩き出した。

アルバートは、引き金に指をかけた。

「止まれ！！止まらなければ、お前を殺すぞ！！」

それでも、タイラントは前進をやめない。

それどころか、スピードを徐々に上げてきていた。

「やはり、お前も・・・化け物か・・・」

アルバートは、引き金を引いた。デザートイーグルから放たれた弾は、タイラントの右肩にあたった。

しかし、服に穴が開いただけで、目立った外傷はなかった。

アルバートは、立て続けに撃った。腹、右足、顔。

しかし、効果はなかった。

「お前は、普通の化け物とは違うらしいな・・・」

その瞬間、タイラントは、走り出した。

（速い・・・）

タイラントは右腕を引いた。次の瞬間、拳がアルバートに迫ってきた。

しかし、アルバートは、拳が当たる瞬間、しゃがんで、回避し、そのまま前転をして、タイラントの後ろに回った。

そして、体勢を立て直すと、銃を構え、撃った。

弾丸は、タイラントの背中命中した。

しかし、まるで効いていない。

「くそっ・・・」

アルバートは、デザートイーグルをしまうと、肩にかけていたアサルトライフル「G36」を装備した。

同時に、タイラントは、こちらに向き直った。

そして、G36の引き金を引いた。

タイラントの服は、どんどん穴が開いていくが、

タイラントは、ほぼ無傷だった。

G36は、フルバーストしていたため、弾薬が無くなった。G36から、素早くマガジンを抜き、それを投げ捨て、新しいマガジンをつける。

それと同時に、タイラントは、こちらに向かってきた。

そして、両手を組み、一気に振り下ろした。

アルバートは、左側に移動し、攻撃をかわした。

そして、タイラントの腕を射撃した。

タイラントの指が、一本吹き飛んだ。

腕に続き、アルバートは、タイラントの足を射撃した。

タイラントは、その場に転倒した。

アルバートは、タイラントから距離をとると、

手榴弾を取り出し、ピンを抜いた。

「喰らえ!!」

タイラントの所に、手榴弾を投げると、アルバートは、その場に伏せた。

それから数秒後、爆音が聞こえ、タイラントの周りには、煙が漂っていた。

「これは、どうだ・・・」

そして、煙が晴れてくると、タイラントの服は、無くなり、

タイラントの皮膚は、焼けていた。

タイラントは、また立ち上がり、こちらを向いた。

「まだ・・・立ち上がるのか・・・」

タイラントは、咆哮をあげた。

その瞬間、右腕が変化し、針のようになった。

「まだやる気か・・・」

（くそつ・・・。弾薬も残り少ない。まともにやり合ってる時間は・・・）

そう考えていると、またタイラントは突進してきた。

（もう逃げるしかない）

そう思ったアルバートは、タイラントに向かって走り出した。

そして、タイラントの攻撃をかわすと、そのまま、走った。

そして、屋根から飛び降り、街灯につかまり、そのまま下りた。

タイラントは、屋根から落ちてきた。

「しつこいぞ!!」

そして、手榴弾を取り出し、ピンを抜き、後方に投げた。

しばらくして、爆音が聞こえ、煙と炎が辺りを包んだ。

その隙に、アルバートは走り、集合地点にたどり着いた。

「どこだ!!」

そう叫ぶと、ビルの中から、ダニエルが出てきた。

「隊長!!こつちです!!」

「そこか!。・・・ちよつと待ってろ」

そう言うのと、アルバートは、そこに止めてあつた軍用車から、

対戦車擲弾「RPG-7」を取り出し、先端にロケット弾を入れ、

構えた。

すると、前方に、タイラントが姿を現した。

「じゃーな。デカブツ!!」

その瞬間、RPG-7からロケット弾が発射された。

その弾は、真つ直ぐタイラントに向かつていた。

しかし、タイラントはそれをよけた。

「この距離じゃ、よけられるのか・・・」

タイラントは、また突進してきた。

アルバートは、RPG-7にロケット弾を入れた。

アルバートは、デザートイーグルでタイラントの足を数発撃った。

そして、タイラントはよろけた。

「今度こそ喰らえ!!」

再び、RPG-7からロケット弾が発射された。

そのロケット弾は、タイラントに命中した。

その瞬間、あたりには、炎、道路のコンクリートなどが舞っていた。
煙が晴れてきた。タイラントのいたほうを見ると、タイラントは、

胴体と足が

千切れていて、腕と、顔が吹き飛んでいた。

「やっと死んだか・・・」

その後、アルバートは、仲間たちと合流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5012d/>

バイオハザード～Eternal Darkness～

2010年10月11日17時16分発行